

場のイメージ分析と商品戦略 (商品開発編)

1120417 和田育恵、大西萌、西森優美

高知工科大学マネジメント学部

1. 概要

ある和菓子屋の経営者から山にある素材で新しい商品を出してほしいとの要望があった。山の素材で作った商品を出すことで山のイメージ向上と、和菓子のイメージ向上の相乗効果を測るためである。そこで、本研究では山にある素材を調べ、その中でも力を入れている柚子に着目し、柚子の新商品を開発した。

2. 背景

ある和菓子屋が山の中にある。山は整備されており、四季折々の風景や植物を体感することができる。

和菓子屋の経営者から山にある素材で新しい商品を出してほしいとの要望があった。

主な要望は、花を使用した商品の開発とお茶の開発である。花とは、柚子を生産する上で利用されていない花や、山で咲いている薔薇、梅、桜などである。四季を通じて様々な種類の花があるので商品案が豊富になりそうである。中でも山は柚子に力をいれているので、柚子で商品をつくることとなった。

柚子の花の成分を分析し、分析結果に基づき商品案を練る。文旦の花も摂取して柚子の花との違いを比較する。

柚子についてのイメージを知りたいと思い、アンケートをとった。アンケートの結果、柚子の商品イメージは石鹸、歯磨き粉、柚子の形の入浴剤、柚子のオイルリップ、柚子成分入りのボディクリーム、ゆずのパック、乳液、化粧水、香水・お茶などがあり、大半が美容関係の商品だった。

柚子の実や皮から出来る商品が多かったが、柚子の花の商品イメージは浮かばず、また柚子は年輩向きと考える傾向があることがわかったため、花を使った見た目でも楽しめる商品をつくることとなった。また、花を使った商品が多く市場に出ていないので隙間産業に入ることができるのではないかと思った。柚子の透明石鹸のなかに花を咲かすイメージで商品を開発していくことにした。

また、アンケート結果にあったゆず茶に着目した。ここにあるゆず茶とは、柚子の実で作ったジャムにお湯を注いだものであるが、柚子の葉でお茶をつくることのできるのではないかと思った。柚子の茶葉に乾燥した柚子の皮を粉砕させたものを混ぜたものでお茶を出し、その中に花を浮かべるイメージで商品を開発していくことにした。

3. 研究の目的

本研究は、和菓子を製造販売する企業の本社がある山のブランド化を行うために、山にある素材を使用し、ストーリー性のある商品をつくることにする。これをお持ち成しの一環として使用し、山のイメージ向上を狙うことを目的としている。

4. 研究の方法

本研究は以下の関連研究と連携しており、本研究成果を受けて商品開発の企画へと繋げたが、全て一体的に行った。

- 1).山のブランドイメージ構築
- 2).お客さんの意識構造モデルの検証研究
- 3).柚子石鹸、柚子茶の開発 (本研究)

4.1. 石鹸の研究手法

柚子の花の成分分析と石鹸の試作を物質環境工学科の生徒に依頼をした。試作は 2 回行い、試作 1 では液体石鹸と固形石鹸をつくる。固形石鹸は透明石鹸の工程を参考にする。花の色を変色させないように、グリセリン、エタノールで花の水分を抜き、石鹸の要素を加える。

試作 1 で固形の透明石鹸が白濁してしまったため、試作 2 は温度調整をしっかりとる。石鹸に臭いがつくように柚子の皮を使用する。

4.2. お茶の研究手法

試作品を自分たちで作る。試作は 5 回まで行った。

試作 1 は柚子の葉を使ってお茶を作りたいかったが、柚子の新芽の季節ではないため、金柑の新芽で茶葉を作る。製造方法は葉を洗った後フライパンで炒って乾燥させたものである。

試作 2 は柚子の葉で茶葉づくりをした。お茶の味の変化を調べるため、製造方法を 2 通りに絞り作ってみる。これを A、B とした。A は葉を洗った後にフライパンで炒ったもの、B は葉を洗ってから鍋で蒸した後にフライパンで炒ったものである。

試作 3 は前回の B の試作品と、とれたての葉との違いを調べるために採取したその場で作業をし、製造方法は B と同じものとする。

試作 4 の製造方法は鍋で蒸して、乾燥させるためにフライパンで炒るが、蒸す作業の時間を 15 分刻みで徐々に延ばしていった。蒸し時間は、15 分・30 分・45 分・60

分・75分とする。

試作5も同様に90分・105分・120分と蒸し時間を15分刻みで徐々に伸ばしていった。

5. 結果と考察

5.1. 石鹸の試作結果

花の成分分析をしたところ、花からでるオイルには美容成分がなかった為、石鹸に使用しても美容効果が期待できないことがわかった。そのため、香りや見た目を楽しむこととなった。

試作1の固形石鹸は透明石鹸の材料であるパーム油を使用した為、白濁してしまった。試作2は温度に注意したため、試作1より透明に近くなったが、完全な透明にはならなかった。試作2で臭いをつけるために冷凍ゆずの皮の粉碎を混ぜたが、ココナッツオイルの臭いに負けてしまった。また、柚子の臭いをつけるのに、石鹸の工程の温度に合わせると、柚子の臭いに変質してしまう。



写真1.試作1の液体石鹸と固形石鹸

5.2. お茶の試作結果

お茶試作1は金柑茶だったため、お茶として飲むことができた。試作2は、Aは独特な臭いよりも青臭さが強く、最後まで飲むことができなかった。Bは独特な臭いがしたが臭いに慣れるとお茶として飲むことができた。試作3は、青臭さが少なかったが試作2のBとの差が見受けられなかった。試作4は、蒸し時間60分のお茶を試飲。お茶として飲めるが、青臭さが奥深くにある。サラッと飲むことができる。茶葉に柚子の乾燥した皮を混ぜてみたものは青臭さが緩和されるので味が整った。試作5は蒸し時間120分のお茶を試飲。独特なさわやかな麦茶で後味残らずスッキリする。試作4との変化が見受けられなかった。茶葉に柚子の乾燥した皮をいれることで柚子の葉の青臭さが消えた。



写真2.蒸し時間120分のお茶と、茶葉に乾燥した柚子の皮を混ぜたもの

5.3. 石鹸の考察

温度調節をきちんとしないと、透明になる材料を使用しても白濁してしまう。

ココナッツオイルは臭いがきついため、柚子の皮の臭いがつきづらい。

石鹸の工程の温度と柚子のオイルの抽出の温度が違うため、石鹸の工程の温度に合わせると柚子の臭いに変質してしまう。

5.4. お茶の考察

蒸し時間が長ければ長いほど、青臭さが抜ける。しかし、蒸しによる青臭さを飛ばす力には限界があるとみられる。蒸すことで細胞膜が柔らかくなり、うまみ成分で、生くささが消える。うまみ成分である香ばしさは、お茶の焦げの風味である。

6. 今後の課題

6.1. 石鹸の課題

柚子のオイルを30~40度で蒸留塔を使用し摂取する。ココナッツオイルを、臭いのあまりしない透明石鹸をつくることのできるオイルに変更する必要がある。美容に使うものなのでデータを押さえないと危険である。

6.2. お茶の課題

今回の柚子の葉は剪定した葉から採取したため、お茶の原理と柚子の葉が適応していれば、捨てるものから商品をつくるができるということになる。

乾燥させた葉を遠赤外線にあてることで、葉を焦がさずに茶葉をつくること・青臭さを飛ばすことができるので、工学部に遠赤外線を使用しての茶葉づくりを依頼する。同様に、アレルギーの問題も正確なデータがないので、葉を摂取しても体に影響がないか、微粉にして成分分析を依頼する。

石鹸・お茶は高知の工場で作って、里で売ること。

参考文献

石鹸

- [1] オリーブ石けん、マルセイユ石けんを作る
(著書)前田京子、(発行者)土井尚道、(発行所)株式会社飛鳥新社
- [2] 石けんのレシピ絵本
(著書)前田京子、(発行者)黒川裕二、(製本所)共同印刷株式会社、(発行所)株式会社主婦と生活社

お茶

- [1] 「普通蒸し煎茶と深蒸し煎茶」
<http://www.nishikien.com/others/others-3.html>
追記：お茶の製造方法を参考にした URL は個人のサイトであったため、参考文献として参照していない。